【高等教育研究部門】

本学入学者の夢を実現する初年次教育プログラムの開発

研究代表者　櫻井　孝俊（数学教育講座）
研究分担者　飯田　史也（学校教育講座）
研究分担者　小田　泰司（社会科教育講座）

Designing the First Step Education Program to Materialize Fleshers' Dreams of F.U.E.

Takatoshi SAKURAI[1)]
Fumiya IIDA[2)]
Yasuji ODA[3)]

1) Department of Mathematics Education
2) Department of School Education
3) Department of Social Studies Education

This is to study the designing of the first step education program in F.U.E.

First, we investigate the mentor support system by the teachers of elementary and junior high schools in Fukuoka Prefecture to support F.U.E. students.

Second, we evaluate F.U.E. Students school library voluntary activities at Jinoshima Elementary School of Munakata City.

キーワード：メンターシステム、モニター教諭、図書館ボランティア
Key words：mentor system, monitor teacher, school library voluntary activities.

福岡教育大学学生と地域小・中学校教員との
メンター制度構築の可能性に関する研究
–その構築可能性に関する附属小・中学校教員
　への意見調査–

福岡教育大学学校教育講座　飯田史也

Ⅰ　研究の目的

福岡教育大学ではこれまで、１年次での体験実習、２年次での観察参加・基礎実習、３年次での本実習という実習制度を構築し、一定の効果をあげてきた。また大学・自宅近辺の学校ボランティアに参加することで教育現場を実体験し、その学校の先生方からご指導いただいている学生も多くいる。いっぽうで、教育実習において実習生としての基本的なマナー違反をしたり、在学途中で教職への夢を失ってしまう学生のいることも事実である。

こうした現状に鑑み、教育総合研究所「高等教育研究部門」では、福岡教育大学学生と地域の教員との間の「メンター制度」を構想した。これはすべての学生に１年次から地域の公立学校の先生（以下「モニター教諭」と呼ぶ）を割り当て、卒業までの４年間、学校業務の支援や児童・生徒の学習支援をしながら、「モニター教諭」から指導をいただき、教員としての基本的な資質を向上させ、教職への理解を深めることを構想するものである。さらには教員としての心構えを含むインフォーマルなご指導をいただくことで、教職への夢を確固たるものにし、良識と品格のある教員資質を錬磨することを目的とする。また学生自身が、モニター教員の姿に将来の自身の姿を投影することで、教職への夢を具体化し、明確な目的意識を持った大学生活を送れるようにするものである。

本研究では、このようなメンター制度の実施可能性について、福岡教育大学附属小・中学校教諭の意見を集約し、さらにはより効果的な実施策についての意見を収集することで、メンター制度素案作成に期する多くの知見を収集することを目的とする。

Ⅱ　「メンター制度」構想の概要

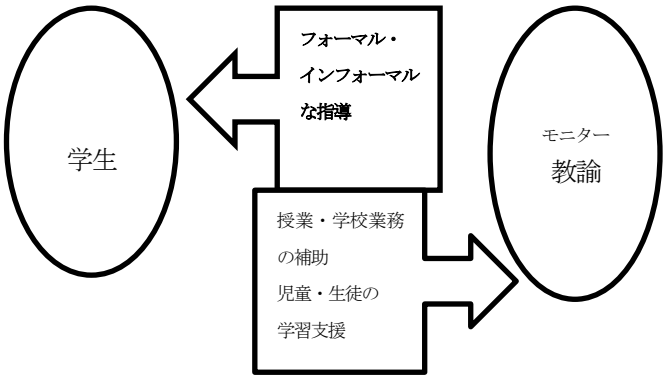
１、福岡教育大学学生は、入学時に大学近辺（自宅生の場合はその近く）の公立諸学校の、「モニター学生」となり、ひとりの「モニター教諭」に、原則卒業までの４年間、各学年の能力に応じた指導を受ける。一人の「モニター教諭」は　１～４名程度（各学年１名）の学生を担当する。

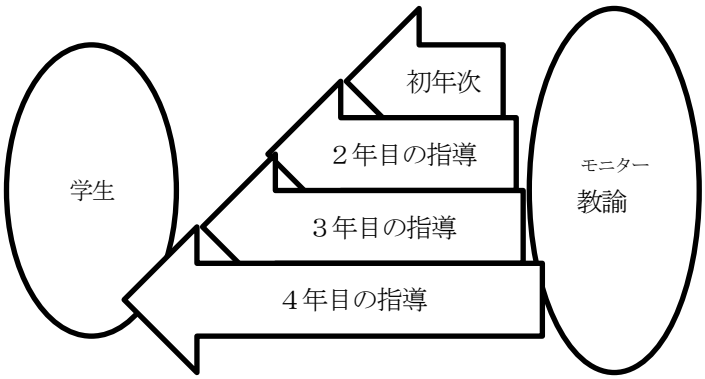
２、「モニター学生」は、適宜「モニター教諭」の学校に出向き、その指導を受けながら、学校業務の補助、児童・生徒の学習支援、各種行事の実地見学・補助等を行なう。

３、「モニター教諭」からは、学年や実習等の経験に応じて、教員としての心構え、社会人としての基本的なマナー等についても指導してもらう。

４、「モニター教諭」の了承があれば、新任教員として就職後もインフォーマルに指導してもらう。

図１　メンター制度概念図





モニター教諭の指導内容

１年目　例：教職への夢の創成　子どもの学びや行動観察の着眼、基本的な学校業務の理解　等

２年目　例：学校行事の具体的運営の理解等
様々な教科・領域の授業観察　等

３年目　例：教育実習本実習を見据えた授業実践の理解　等

４年目　例：より高度な授業実践、子どもへの生活指導学級経営の実際の理解、教員としての基本的マナー、礼節、停年までのライフステージ　等

Ⅲ　調査の方法

本学が「メンター制度」を実施するにあたり、具体的にはどのようなことが課題となるのか、また実効性のある具体的な実施方策について、福岡

教育大学附属小・中学校教諭へのアンケート調査（調査紙法）により検証した。なお今回のアンケートは、附属福岡小・中学校、附属小倉小・中学校の教員対象に依頼した。これら４校を対象にした理由は、以下の４点である。
１、附属小・中学校では、多くの教員が、公立校における 10 年以上の教職経験を持っており、その経験に基づいた回答が得られること。
２、附属小・中学校では、すべての教諭が、福岡教育大学の教育実習にかかわっており、学生指導に関わった経験を持っていること。さらに本学学生の実態をよく把握していること。
３、モニター教諭が勤務される福岡教育大学近辺の小・中学校は、福岡県北九州教育事務所管内にあるが、附属小倉小・中学校には原籍がこの北九州事務所にある教諭が多いこと。
４、福岡教育大学学生のうち自宅生の通学最大範囲（北九州市～福岡市、田川市～太宰府市）が、４校の教諭の原籍教委・教育事務所エリアにあたること。

Ⅳ　回答結果
　１２月３日までに回答いただいた総数は全７０件であった。　以下質問１～５に対する回答を記述する。

質問１　モニター教諭」として、以下３つのうちどの世代の先生が適当だと思われますか？数字に〇をおつけいただき、またその理由をお書きください。

それぞれの項目の回答パーセント及び、記載されている理由は以下の通りである。
a)「教職歴１０年までの若手教員」15.7%
理由：／年齢的に近く、学生と共感しやすい／年齢が近いと指導が伝わりやすい／悩みや現実問題を共感的に共有できる／今後人数が増える世代である／教員自身もスキルアップを目ざして研修している時期である
b)「教職歴１０～２０年の中堅教員」71.4%
理由：／ミドルリーダーとしての教諭自身の経験の必要性／社会人としてのものの見方／学校全体を視野に入れた指導性／仕事に精力的な時期で学生との心理的距離も近い／現場に返すことのできるミドルリーダーとして／研究校務運営の中心であり実感を通した学びができる／ミドルリーダーとしての力量と活力／教師の仕事の内容がよくわかる世代／スムーズな仕事分担／生徒と接する機会が多く、学校の中心となる世代／（学生が）もっとも忙しい中堅世代のサポートに入れる／考えが古すぎず学生も受け入れやすい／全体の流れと手順が把握できている／指導技術等を含め適切な学生指導ができる／現代の教育事情を子どもの切実な問題としてとらえている／学生とのなれ合いにならない／全体を見ての提案ができ自身も初心に戻れる
c)「管理職を含む教職歴２０年以上の教員」12.9%
理由：／学校全体に貢献する視点がある／役職経験が指導の際に生きる／広い視野からの指導／この世代でなければ自身の業務で手一杯／余裕を持って学生に接することができる／教科学級以外のことも様々な面から教えるための経験値が高い
　回答ではb)「教職歴１０～２０年の中堅教員」が一番多く、約 70%を占める。

質問２「モニター学生」に補助させる業務として、先生ご自身はどのようなことを想定されますか？

　自由記述として記載されたものを、５つに分類すると以下の通りである。
a) 授業補助／教材作成補助／評価補助／小テスト等採点補助／TTの業務／時にT１としての授業
b) 学級経営補助／学級・校務分掌事務補助
c) 学校行事補助／校務運営補助
d) 給食指導／登下校指導補助／部活動・委員会活動補助／放課後学習支援／校外学習引率補助
e) 休み時間の遊びの見守り／昼休み等の児童との遊び／気になる児童への声掛け

記載がもっとも多いのは授業補助を中心とする a) の回答であり、b)の学級経営に関わる業務、c) の学校行事や特別活動等がこれに続く。　e) については、教員の業務としてはインフォーマルな業務として、学生がもっとも力をつけることのできる、重要なものであるといえよう。

質問３　先生ご自身が「モニター教諭」となられた場合、どのようなことをご指導いただけますか？

自由記述内容は、７つに分類することができる。
a) 教科・領域の授業実践指導／授業の基礎的な作り方／授業の基礎基本／教材研究／教具作成の視点／評価の仕方／教室環境のつくりかた／学習の困難を克服させる支援の在り方／個に応じた指導／特別支援教育
b) 教師としての１日の動き／児童下校後の教職員の仕事／学級経営／学校・学級事務／個人情報の保護／部活動指導
c) 子どもの健康管理／給食指導／食の指導／子ども統率のマネジメント／生活指導の在り方
d) 児童との関わりかた・接し方／子ども理解／保

護者との接し方
e) 教員としての心構え／人として社会人としての在り方・心構え／教職のつらさ／協力することの大切さ／コミュニケーションのとり方
f) 教員としての自己健康管理
g) 採用試験へのアドバイス
　回答にはa)やb)、c)などの授業実践や学級経営、子どもの生活指導に関わる内容が多かったが、d)のように子どもや保護者との接し方を記載したもの、また e) のように教員としての心構えや修養を記す回答も多かった。f) の教員としての自己健康管理については、近年増えつつある、教員の病気休職への配慮といえよう。職業人としての自己健康管理を学生のうちから習慣化することのメリットは大きい。g)の採用試験へのアドバイスは、本プロジェクトにおいては事前に想定していなかった回答である。学校現場実践の場の中で理論と実践とを往還しながら、現職の先輩からの教採へのアドバイスを受けることは、学生にとって有意義な恩恵となろう。

質問４　モニター学生が学校へお邪魔する頻度は、どの程度が妥当と思われますか？

分子分母を自由に記述してもらった結果は以下の通りである。なお、週あたりの記述と月あたりの記述が同じになるものはひとつにまとめる。
３回／１週　　4.28%
２回／１週　　30.0%
１回／１週　　54.3%
３回／１月　　2.85%
１回／２週　　22.8%
１回／１月　　12.9%
１回／１学期　1.42%
複数回答あり
「１回／１週あたり」との回答が多い。学生への指導効果の継続性と負担過重とのバランス、学生自身の週単位での授業日程とのバランス等への配慮に基づいた回答である。

質問５　将来福岡教育大学が、この「モニター制度」を実施する場合、どのようなことが課題となるとお考えですか？　また、有効な実施方法等について、お考えやアイデアがあれば、ぜひお聞かせください。

この質問５では自由記述により非常に多くのご意見をいただくことができた。内容を分類すると以下のようになる。
a) 学校やモニター教諭自身の負担に係る課題
　勤務時間内での指導時間の確保が課題／モニター教諭の負担増加が課題／時間確保の課題／状況の厳しい学校では特に教諭の負担が増える／学校行事等との日程の調整の必要性／公立校では実習生＋モニター学生受け入れは余裕がないかもしれない／業務の多い附小では実施は難しいのでは／負担と給与とのライフバランスをどう確保するか／モニター教諭への対価は？／
＊課題にかかわる対策意見
　担任外の同教科・同学年教諭との連携／（モニターを）時間講師に任せては如何？／予定が臨機応変に変更できることが大切／チームによる指導体制を確立する／副担任なら可能／

b) 事故やトラブルにかかわる課題
　個人情報や機密漏洩への配慮／事故時の責任所在／責任や安全面から仕事を何処まで任せるか／
＊課題にかかわる対策意見
　トラブルに関わる規定をあらかじめ紙面にしておく／保護者や子どもにしっかり理解してもらう

c) 学校、学級間の差異発生にかかわる課題
　学生の有無による学級間格差の発生／学校による格差／学生の立場の学校間のずれ／学生が同一地域の学校文化の影響を受けてしまうのではないか／学校が制度をどう捉えるのかによって実施内容に差が出てしまうのではないか

d) 学生自身の負担にかかわる課題
　学生への要求過多の懸念／モニター教諭からいいように使われてしまうのではないか／学生の費用負担／大学からの距離／大学の講義との競合／
＊課題にかかわる対策意見
　モニター教員になるための研修／モニター教諭をどう選ぶか／事前研修／モニター教諭の資質確保／定期的に第３者が入る打ち合わせ／職員の共通理解確立／モニター教諭の意思の確認

e) 学生の意欲・心構えにかかわる課題
　無知でやる気のない学生が迷惑をかける可能性／
＊課題にかかわる対策意見
　かならず教員志望者がくるようにすること／学生の面接等でふるいにかけてから派遣するのが良い／　学校での様子を大学が把握する事が大切／評価基準等の明確化　評価の方法の確立／希望する学生のみにすると多忙な現場でも受け入れる価値がある／学校の要請に応じて派遣するような制度はどうか

f) 学生へのマイナスの影響に関わる課題
　学校の現実の中での教職の夢を失うことが不安

／学校の現状から教員志望をあきらめるのでは／社会人と学生との間の意識の溝／一部しか見ないと職業としての教員を見誤る／
＊課題にかかわる対策意見
　学生は１日の活動についてすべて関わり、教職全般について知ることが重要／制度の目的の明確化

g）その他の課題・対策
　モニター教諭、モニター学生の相性が悪い場合どうするか／異動により一人の教諭が４年間の継続困難の場合がある／教育実習との差異をどう出すか／附属学校の役割をどうするか／大学教員との意識の差が出るのでは／教員免許取得後２年程度インターンのように学ぶのがよい／研修を充実させる／学校の新採指導教員の指導をともに受けるのがよい／各教科の若年研修を学生にも受講させる／学生が継続的に学校にかかわるのは大きな力となる。長期にかかわることのメリットを生かせればよい／部活動や教科の専門性を元に、選択制にしてはどうか／教育実習を２つにわけ、授業実習と業務実習とに分けてはどうか？／具体的方策を明確にするのがよい

Ｖ　まとめ
　アンケート質問５への回答で、課題として一番多く挙げられたのは、モニター教諭の負担にかかわる課題である。質問４では、学生が学校へ出向くのに一番適当な回数として、１週あたり１回と１週あたり２回で、回答の約８０％を占めたが、今後の素案作成にあたっては、学生訪問頻度の策定とともに、モニター教諭および学校への負担をどのようにしてゆくのかが、充分に配慮するべき課題といえる。また c）学校、学級間の差異発生にかかわる課題、f）学生へのマイナスの影響に関わる課題についての回答は、本プロジェクトにおいて想定していなかった課題である。ご指摘のように学校・学級規模の差異、またそれに伴う子どもの様子の差異により、学生自身が体得する経験値に差が出てくる。それを大学としてどのように取り扱うのかが課題である。さらに f）については、実際の教育現場の厳しさを学生のうちに体得することのメリットとデメリットを十全に検証した上で、素案作成にあっては、学生自身への十全な事前指導と、学校との十全な打ち合わせが必要であろう。
　今回はより有効な制度の設計に関わる多くのアドバイスもいただくことができた。インターン制度や、学校における新任教員の研修などとともに行なうのはどうかというご意見、また実習を授業実習、業務実習と２つに分けるアイデア等、貴重なものである。また学生のやる気やマナーの課題に関しては、学生の選抜、選択制の採用等、モニター制度実施にあたっての現実的なご意見をいただいた。以上、貴重なご意見を、今後の素案設計に活かしてゆきたい。
　さいごに学期末の多忙な中、調査にご協力いただき、貴重なご意見を下さった福岡教育大学附属各校の先生方に、お礼申し上げる。

「児童への読書促進・支援研究」
の試行的取り組み

福岡教育大学社会科教育講座　小田泰司

　本学が解決すべき課題の1つに、教職を志望して入学した学生が四年次までに志望を変更してしまうというものがある。学生は初年次から四年次までに、体験実習や基礎実習、教育実習、教育総合インターンシップ実習、副面実習を通じて、教育現場で学ぶ機会を得ているのに、である。そのため、初年次から「今日的な教育課題の解決について考える」、「教育現場に理解を深め、教職意欲を高める」、「子どもたちと共に主体的に学ぶことができる」授業やボランティア活動を構築していく必要がある。そのため本研究では、宗像市立地島小学校にご協力いただき、教員を志望する学生が「学校図書館の活性化を通じて児童に言語力を育成するための課題を発見・解決しようと主体的・協働的に学ぶことで、教育現場への理解を深め、教職への意欲を高める」ことを目的に、地域や学校が取り組む児童への読書促進・支援活動を実施することにした。

【日時】宗像市立地島小学校
【場所】平成27年10～12月２回木曜(計６回)
【参加者】１年生４人(男２名・女２名)
　　２年生５人(男１名・女３名)
【授業目的】学校図書館の活性化を通じて児童に言語力を育成するための課題を発見・解決しようと主体的・協働的に学ぶことで、教育現場への理解を深め、教職への意欲を高める。
【授業計画】
１　小学校の図書館は、今どうなっているのか。
２　学校図書館を見学に行こう!!(1)
３　学校図書館を見学に行こう!!(2)
４　見学してどのようなことに気づいたか。
５　魅力ある図書館にするために何が必要か。
６　図書館整備に協力しよう。(1)
７　図書館整備に協力しよう。(2)
８　児童に読書を促そう。(1)ポップ・紹介文

９　制作物をもち、児童に読み聞かせに行こう
10　児童に読書を促そう。(2)ポップ・紹介文
11　制作物をもち、児童に読み聞かせに行こう。
12　児童に読書を促そう。(3)ポップ・紹介文
13　制作物をもち、児童に読み聞かせに行こう。
14　学校側からの取り組みへの評価と自省
15　活動報告会

【活動目的と実際】
・地島小学校の様子
地島小学校は、宗像沖合の地島にある小学校で、2015年現在の全校児童は15人で、島外から漁村留学児を4、5人受け入れている小さな学校である。学級は複式で、低学年(1、2年)、中学年(3、4年)、高学年(5、6年)の３学級で成っている。
　地島小学校を協力校に選んだのは、市内で唯一司書教諭の配置がなされていないこと、島の小規模校で常時ボランティア学生が入っていないことが主な理由である。これは
①よりよい教育現場の創出に向けた教育課題を克服する教師の取り組み(司書教諭がいない中で、言語力育成に向けて読書活動を充実したものにするためにどのようなことを行っているのか)を知ることができるのではないか、
②１人で多くの子どもたちを相手にするよりも、少人数の方が大学生が教職に向き合う自分の姿を確かにすることができるのではないか、③地島小学校は小規模校であることから人手を欠くこともあるため、教育現場の未経験者でも何かしらのお手伝いができているかもと肯定感をもつ機会もあるのではないか、と考えたからである。
地島小学校では、有馬宏校長先生をはじめ全ての先生方に協力・指導をいただいているが、中でも薄先生には、直接的に図書指導に関するご指導いただいている。学生は午前中に大学で授業があるため、午後からの参加になるが、着くとまず、昼休みの「遊び」「図書指導」に加わり、児童と交流する。その後、５限と６限に配当されている予定に応じて指導を受けている。

【地島小学校における学生への図書指導】
　図書指導では、大学生は読み聞かせをしたり聞いたり、しおりづくりをしたりPOPづくりへのアドバイスをしたりする活動が主であるが、市の図書課職員の方が行われる児童への指導に参加させてもらい、本の読み聞かせ方、画用紙を用いた小さい本の作り方を学んだりもした。12月17日に長期休業を控えて、図書館での貸出や意欲づけについての学びがこれから控えているが、学生がどのような声をかけて読書を促すのかも関心がある。

【地島小学校の子どもたちと学生の交流】
これまで４回、児童と大学生は「遊び」「読書」を通して関係を深めてきた。島外からの、普段接する機会のない大学生との交流は、児童たちにとってすぐに良好な関係を築くのが難しかったらしく、ぎこちないものであったが、大学生にとってもそれは同じであった。だが、回を重ねるごとに児童からは「いつ来るのか」と楽しみにする声が聞かれたそうである。また学生からも楽しみにする感想がみられた。「教育現
場に理解を深め､教職意欲を高める」については、達成されているようである。

初年次学生Aの学びの振り返り(期間内５回分)
【10/8】　私は地島小学校へ行くまで最近の小学生はそこまで図書に興味がないものだと思っていました。しかし実際は地島小学校の児童は図書に興味を持っていることを実感しました。
　私は今回、絵本の読み聞かせをしました。今まで小学生に絵本の読み聞かせをする経験はなく、子どもたちが反応してくれるかどうかとても不安でした。そして、読む前に私の担当した班の全員が私が選んだ絵本を読んだことがあると聞き、喜んでもらえる自信がありませんでした。しかし、子どもたちは知っている内容の絵本にも関わらず、皆真剣に聞いてくれました。今後、子どもたちと図書を介して、直に接することでわかることを発見したいと思います。
【10/15】　私は今回の地島小学校で、高学年の児童とお互いに読み聞かせをするという体験を初めて経験しました。読み聞かせの方法を司書の先生に習った高学年の児童は、読み聞かせをするという自ら発信する側に立ちました。読み聞かせをする中で、一番注意するべき点は聞き手の立場を考えるということだと思います。児童たちは、はじめは自分が読みやすい方法で読み聞かせを行ってしまっていましたが、学生のアドバイスを聞くことで、聞き手が聞きやすくなるような読み聞かせ方法に変わりました。読み聞かせという図書活動をとおして、子どもたちは本に触れるというだけではなく、様々な人の気持ちを考えられるようになるのではないかと感じました。
【11/12】　私は今回の地島小学校で、高学年の児童に絵本の読み聞かせをしてもらいました。先週学んだ読み聞かせ方法を活かし、先週よりも確実に上達している子どもたちの姿に成長が見え、喜びを感じました。また、子どもの授業に参加し、共に本の歴史について学びました。子どもたちが真剣に図書の向き合う姿は可愛らしく、やはり自分は子どもが好きだということを再認識しました。しかし、今回の活動ではあまり子どもと関わるこ

とができなかったので次回はもっと子どもたちと関われるようにしたいと思いました。
【11/19】　今回の地島小学校では(行事会場設営の)お手伝いをするのみでしたが、前回よりも子どもたちとの距離が縮まったように感じました。子どもたち側から、遊びに誘ってくれたり、子どもたちだけでできないことなどは頼ってきてくれました。距離が縮まったことによって次回からの活動もより円滑進められるような気がします。
【12/10】今回の地島小学校での活動では、子どもたちと仲良くなれました。前回からようやく子どもたち側から近づいてきてくれるようになり、今回は前回よりも仲良くなることができ、嬉しかったです。子どもたちと昼休みを共に過ごし、少人数校の長所でもある学年を超えての交流を身近に感じることができてよかったです。高学年の子どもは低学年の子どもに対して、優しくしたり、譲ったり、ときには注意をする場面を見ることができてよかったです。来週で最後になってしまいますが、子どもた
ちと楽しく過ごせるように努めます。

活動に対するアンケート集計(Aのみ)
【読書】1　小学校における読書活動についてどのようなことを学びましたか。
A：私が小学校の時は読み聞かせをしてもらうだけであったが、今回、高学年の児童が読み聞かせをする側になっていたり、新たな読書活動の形を学ぶことができた。
2　今回学んだ、児童の読書活動を指導する際に有効な方法を、具体的に挙げて下さい。
A：読書活動の指導を行う相手・対象を考えて本を選んだり、説明を行ったりする工夫が有効な方法だと思った。低学年には紙芝居も有効だった。
3　読書活動を促進するためには、どのようなことが必要だと考えましたか。
A：本に触れる機会を増やし、まずは自分が興味をもった本を読むところから始め、子どもたちが徐々に幅広い分野の本を読んでいけるようにすることが必要だと考えた。

【児童】4　今の児童について、どのように感じましたか。
A：地島小学校に行く前に赤間西小学校にいったことがあったが、少人数の学校の児童と大人数の学校の児童の違いを感じた。普段触れ合う人の数の差がその違いを生じさせたと思うが、児童はみんな何事にも全力で、行事などの活動も真剣に取り組んでいるという印象をもった。
5　児童に対する自分のコミュニケーション力について、何か感じましたか。
A：初めて地島小学校を訪れた時、緊張しながら児童に話しかけたため、あまり会話を弾ませることができなかった。回数を重ねるごとにだんだんと話せるようになっていったが、初対面の児童とも堂々と話せるコミュニケーション力をつけていきたいと思った。

【教員志望】6　今回の活動は、教員志望に影響しましたか。どのように影響しましたか。
A：実際に児童と接して教員になるという気持ちがさらに高まった。小さい学校ならではの取り組みに、将来自分が教員になった時のことを考えさせられ、教員志望へのよい影響があった。
7　今回の活動は教員になる上で有効でしたか。その場合、どのような点で有効でしたか。
A：大学の講義では見えてこない、児童の様子を間近で見ることができ、実際に接す
ることができた点が有効だった。少人数の学校にいったのは初めてで、いろいろな児童がいることを再確認できた点も有効だった。
8　今後、教員になる上でどのような能力・技能を伸ばしていくべきだと感じましたか。
A：児童の性格や生活の様子から1人の児童としてその子を見ていいところを伸ばしていけるような能力をつけていくべきだと思った。どのような児童を取り巻く環境に柔軟に対応していく力を身につけたい。
9　そのために、どのような学び、活動をすればいいと考えますか。
A：日常生活の中で、些細なことでも「自分だったらどう行動するか」を常に考え、行動するようにしたい。様々な人と関わって、より多くの経験を積んでいきたい。
【その他】10　意見や感想、気づきなどがあれば、書いてください。
A：今回地島小学校を訪れて、自分の思っている児童像はいつの間にかイメージの中でできてしまっていて、今までのままだったら新たなタイプの児童と向き合うことは出来ていなかっただろうなと感じた。今回感じたことを将来教師になった時に活かしていけるように、日頃から多くの人と接し、多くの経験をし、幅広い知識をつけていきたいと思う。

「児童への読書促進・支援研究」の成果と課題
・最終アンケートにあるように、教師になりたいという意志は強くなり、いろいろ学ぶことはあるが、それらは受け入れ側の学校側の関与や好意の程度も大切による。(今回は好意的な指導・協力が得られた。だが、いつもそうとは限らない。)

・活動が終わっても、自発的に文化祭の実施支援などに参加する学生がおり、ボランティア活動が継続した。(意欲の高い学生を選抜したため、意欲の低い学生はどうか…。むしろ教員を志望していない学生のための授業になるかも。)
・今回は少人数校で、児童と個々に人間関係がつくれることを意図して活動を仕組んだが、どの学校でも可能かはわからない。(学生と児童・教員とのコミュニケーションに課題が…。早期に児童・教師と接する活動が必要になるかも。)

「本学入学者の夢を実現する初年次教育プログラムの開発」に向けた３つの学び
「教育・学校を学ぶ」…初年次教育プログラム①自校史や附属校を核とした地域教育史(小倉、久留米など)を学ぶ、②社会(教育委員会)から期待される人間・教員像や理念を学ぶ。
「教育・学校に学ぶ」…学校での教師の行動を観察して、子どもや保護者、地域の人たちとのかかわり方に学ぶ。
「教育・学校で学ぶ」…学生を地域の学校に週1回派遣し、学習支援や行事推進の補助などに取り組む機会を与えるとともに、学期に1、2回程度の図書館活動など主導してさせてもらって学ぶ。